

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19530467

研究課題名（和文）「物語状」質的データによる対人援助専門職専門知の実証的研究

研究課題名（英文）Research and Analysis on Expert Knowledge of Human Services
with Narrative Qualitative Data

研究代表者 後藤 隆（GOTO TAKASHI）

日本社会事業大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：30205603

研究成果の概要：本研究では、ソーシャルワーカー、ケアワーカー、看護師、保健師など、対人援助（ヒューマンサービス）専門職専門知の特性が、関連専門知識、法規、状況判断、クライアントとのコミュニケーション、利用可能な社会資源等々、多様な情報のからんだ、複雑な対象／問題／対策像構成プロセスにあることを、そうしたプロセスを記録した非定型テキスト・データ的一种である「物語状」質的データの計量テキスト分析を通じて明らかにする。具体的には、学齢前障害児通園施設の援助記録の分析、高等看護学校看護学生の看護実習記録の分析をおこなった。では、関連テストによる状態像把握と処遇計画書の関連を、では、看護行為擁護分類と看護学生の看護実習記録および看護研究との関連を、扱った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：対人援助、ヒューマンサービス、専門職、専門知、質的データ、計量テキスト分析、社会福祉、看護

1. 研究開始当初の背景

ソーシャルワーカー、ケアワーカー、看護師、保健師など、対人援助（ヒューマンサービス）専門職の専門知は、しばしば外からはとらえにくく、またそれを発信する自前の記録、分析も十分蓄積されにくい面があった。こうした可視性の低さは、対人援助専門職の専門性の確立、社会的認知にとって、マイナスに作用しているし、対人援助専門職の「質」の評

価が未ださだまりにくい状況とも関わるものである。

2. 研究の目的

本研究では、このような可視性の低さが主として、対人援助専門職専門知そのものの特性、すなわち関連法規、クライアントの状態像把握（表情の読み取り、会話の中での注目する言葉）、自分以外の専門家との「つなぎ」、利

用可能な社会資源とタスク解決のための資源選択、等々、いわば多様な情報のからんだ、複雑な対象/問題/対策像構成プロセスに起因するものととらえ、そうしたプロセスの実証的な分析をおこなうこととした。

3. 研究の方法

そのためのデータとして、非定型テキスト・データの一つである「物語状」質的データを採用している点が、本研究の特色の一つである。「物語状」質的データとは、「ひとつの複文をその最も小さなまとまりとし、通常は、複数の単/複文から構成されるものを、目安とする」「いわゆる「5W1H」(誰が、いつ、どこで、なにを、なぜ、どのように)を含んだある程度ボリュームのある記録文書」であり、「具体的には文字化された、自由回答、参与観察記録、手紙、日記、インタビュー記録、会話記録、生活史記録、看護記録、介護記録、スーパーバイズ記録など」を指す。もう一つの特色は、「物語状」質的データの分析にあたって、自然言語処理と多変量解析を組み合わせた計量テキスト分析(テキスト・マイニング)を用いている点である。読解者の「小見出し」作成を主とする従来の分析法に比べ、分析手続きの明示化、客観化のアドバンテージをもっている。

4. 研究成果

1つは、後藤による社会福祉分野専門職の専門知の分析であり、もう1つは、村上による看護分野のそれである。(なお、各分析で用いたデータについては、データ所蔵施設・機関からその利用承認をえるとともに、以下では、プライバシー保護のため、分析に必要な最小限の情報に限り掲載してある。)

後藤の分析の焦点は、学齢前障害児通園施設で各学年の1学期におこなわれた知能テストの一種である Merrill-Palmer Scales of Mental Development (以下、<テスト>)と、各学年各学期ごとに作成された指導員の当該児観察知見記録(以下、<記録>)とを関連づけ、指導員の専門知の構造の一端を明らかにすることにある。

まず、指導員が<テスト>をどのように用いるかの基本線を、関係者へのインタビューを通じて確認した。基本線は大きく次の2つからなっている。

<テスト>の「該当なし」項目の内、とくにその程度の強いものを、当該児の「苦手な部分」として、注目する。

「苦手な部分」以外に、当該児処遇の可能性を求める。

ここから、ある1ケースを例に挙げる。

同ケースでは、「言語スキル」、「手先の器用さ」、「組み合わせ能力」に関わる項目があたるとされた。

それら以外の項目、すなわち「苦手な部分」以外の項目がなにを表わしている、と指導員に読めるか、を明らかにするために、<テスト>・データから「苦手な部分」を除いた70項目について、「該当あり/なし」をダミー変数行列に加工し、BIC規準によるモデル選択型のクラスタ分析(R2.9.0を使用)にかけ、結果、5つのクラスタを選択した。一部を挙げる。1)積木、いれこの箱、はめ板、絵パズル、棒さし等、2)ことばの反復、絵合わせ、ピラミッド、ボタンかけ、鏡うつし、星模写、短文の反復等、3)はめ板、ピラミッド、4)はめ板、絵合わせ、はさみ、ひもたぐり、絵パズル、絵画完成、片足立ち等、5)絵合わせ、にぎりこぶしで親指を動かす、ボタンかけ、組み合わせ人形、足組み等、の5つのクラスタである。

次に、各学年ごとの<記録>を計量テキスト分析にかけ、各学年ごとの特徴を表わすキーワードを抽出した。図表1で例示する。

図表1

抽出語	全体	共起	確率差
経験	12 (0.017)	8 (0.049)	0.0322
着席	9 (0.012)	7 (0.043)	0.0302
行う	11 (0.015)	7 (0.043)	0.0274
雰囲気	12 (0.017)	7 (0.043)	0.0261
楽しい	40 (0.055)	13 (0.079)	0.0239
オムツ	5 (0.007)	5 (0.030)	0.0236
慣らす	5 (0.007)	5 (0.030)	0.0236
分離	5 (0.007)	5 (0.030)	0.0236
観察	5 (0.007)	5 (0.030)	0.0236
発声	16 (0.022)	7 (0.043)	0.0205

図表1は、1学年めの<記録>から、「経験」~「発声」までの10のキーワードを抽出した結果である。抽出の規準は、他学年を含むすべての<記録>の中での、たとえば「経験」の出現頻度と、1学年の<記録>の中でのそれとの差、すなわち「確率差」である。また、抽出したキーワードが、<記録>の文脈の中でどのような位置をもつかを明らかにするために、図表2に一部を示すような、コンコーダンスを、各キーワードについて検討した。(KHコーダー2.beta.17を使用)

図表2

母以外との食事	経験	が乏しく勧めに拒否的
担任と一緒にいろいろな遊具を	経験	し楽しく過ごす

こうした、各学年の<記録>の計量テキスト分析から、1)1学年めは、母子分離を経験して園に慣れることに重点がある、2)2学年めになると、「担任への注目」、「挙手」、「スキンシップ」などが(担任の観察知見として)「プラス」とみなされ始める、3)3

学年めでは、担任の「促し」に「応じる」、「カード」や「絵本」の「やり取り」を「楽しむ」、「場面」が増える、4) 4学年めでは、「言葉」を使った「会話」や「指示了解」の「コミュニケーション」が「かなり成立するようにな」ってくる、ことが明らかとなった。

総じて、指導員は、<テスト>での「苦手な部分」をふまえつつも、当該児に即した園での処遇の実際の観察を積み重ねる中で、「慣れる」ことから始めて、さまざまな「プラス」(「苦手な部分」以外の処遇の可能性のある項目)に着眼し、それらの「促し」を通じて、やがて<テスト>の「苦手な部分」(このケースの場合、たとえば「言語スキル」)についても、処遇を深めていくことがわかった。

言い換えれば、これは、社会福祉分野での対人援助専門職の専門知が、<テスト>だけでなく、<記録>に表わされている、処遇期間の当該児の変化を含む観察知見とかみ合わせられる構造をもつことを、示唆している。

村上の分析の焦点は、看護の現場での専門職としての「経験」がどのように「言語化」され専門知として整理され、組み立てられていくかにある。具体的には、日本看護科学学会による「看護行為用語分類」(以下、<用語分類>)所収の体系的な看護行為用語と、高等看護専門学校学生が臨地実習を経てとりまとめた「看護研究」(以下、<看護研究>)レポート記載内容との関連を、計量テキスト分析によって明らかにしている。

まず、<用語分類>については、特定領域(たとえば「基本的生活行動の援助」)に注目する。各特定領域は、その中に「分野」(たとえば、「呼吸の援助」)を含む。各分野の中には、関連の「用語」が含まれる。それら「用語」には「定義」がひとつひとつ与えられている。村上はこの「定義」について、次のように指摘している。

「この看護行為用語の「定義」を注意深くみていくと、そこには比較的頻繁に使用されている「語句」があることがわかる。この出現頻度の高い「語句」は、学術用語検討委員会が看護行為に付与した「定義」に何らかの「要因」が影響をおよぼしたことを示唆する。「定義」に使用されている出現頻度の高い「語句」を用いて、看護行為に対する同委員会の「定義」や「分類」におよぼした潜在的な「要因」がわかるなら、これを手がかりにして、そのような「定義」や「分類」にどのような特色があるかを知ることができる」

村上は、こうした分析視点から、「定義」の計量テキスト分析からえられた頻出9語(「必要」、「相談」、「身体」、「状態」等)に

ついて因子分析をおこない、図表3の結果をえている。

図表3

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
相談	0.976	-0.032	-0.010	-0.039	-0.023
保健指導	0.973	-0.034	-0.049	-0.032	-0.023
知識	-0.045	0.826	-0.009	-0.059	-0.230
助ける	-0.019	0.784	0.020	-0.010	0.289
観察	-0.059	-0.158	0.815	0.008	-0.078
必要	0.005	0.169	0.809	-0.068	0.054
注入	-0.029	-0.015	-0.084	0.780	-0.019
挿入	-0.029	-0.044	0.030	0.795	-0.026
身体	-0.038	0.019	-0.023	-0.047	0.955

(主因子法、Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転)

ここから、因子1「保健指導・相談」、因子2「知識をもって援助する」、因子3「患者ニーズの観察」、因子4「医療処置」、因子5「患者の身体」の潜在因子が抽出されたことになる。

村上は、また、これら5つの潜在因子が<用語分類>の特定領域とどのような関係にあるかを、特定領域別の因子得点の平均値を、Tukeyの多重比較にかけることによって、たとえば「情動・認知・行動への働きかけ」という特定領域が、他の特定領域に比して、「保健指導・相談」のウエイトの高い特色をもつことなどを指摘している。

<看護研究>については、その主題及び副題を計量テキスト分析にかけ、頻出語である「援助」、「関わり」、「指導」、「理解」、「変容」等を抽出し、さらに「援助」、「関わり」が「高年齢でしかも3大死因疾患を患う重篤な患者を対象にした研究」で使用されていること、「指導・その他」は「重篤度の度合いが低い「回復期・慢性期」の患者」で使用されていること、<用語分類>の特定領域との関係では、「情動・認知・行動への働きかけ」、「基本的生活行動の援助」の2つの領域に関わるものが顕著であることを、カイ2乗検定によって、明らかにしている。

総じて、村上は次のような結論に至っている。

「学生たちは、その看護研究において、看護の専門職化の中で伝統的に形作られてきた古い伝統を有する基本的な看護行為に加えて、近年とくに看護師に期待されている比較的新しい看護行為、すなわち患者やその家族にたいしておこなわれる心理的な働きかけや教育的な働きかけにより大きな関心を注いでいたのである」

これは、看護分野での対人援助専門職の専門知が、これまでの看護とこれからの看護の重層的な積み重ねの構造をもつことを示唆している。

最後に、本研究の研究協力者松尾によって、「専門知」関連の専門文献(認知科学、教育、心理、福祉、看護、保健、等)のリストが作られていることを付け加えておく。

(報告内容の全文については、印刷物にしてある。T-GOTO@jcsu.ac.jp宛にお問い合わせいただきたい)

5．主な発表論文等

特になし

6．研究組織

(1)研究代表者

後藤 隆

日本社会事業大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：30205603

(2)連携研究者

村上 文司

釧路公立大学・経済学部・教授

研究者番号：40210017

(3)研究協力者

松尾 浩一郎

日本社会事業大学・社会事業研究所・研究員